

古今集声点本における一・二拍動詞のアクセント

——古今集動詞のアクセント 上——

秋 永 一 枝

(本稿のキーワード…古今集声点本・一・二拍動詞のアクセント・動詞のアクセント体系・そへ歌・詰み石)

一 序 説

古今集などの文学作品には動詞に注記された声点が豊富であり、活用形も殆ど埋めることができる。それは、『和名(抄)・名義(抄)』といった辞書類、『四座講式』などの声明とは異なった文学作品ならではの利点であること、形容詞と同様である。例えば金田一春彦氏の『四座(講式の)研究』では、命令形の墨譜付用例は「待て」のみであるところから考察を省かれたが、古今集では一拍語から四拍語までの命令形が出揃っている。(以下、出典及びア(クセント)の()内は省略する。)

また複合動詞の数も著しく、複合の強弱によりアの異なりがみられる。それは、その声点本の成立時期の差でもあり、資料によって複合の弱いものから強いものへの移行がうかがわれる。前後部とも動詞の複合動詞は、「咲き散る」へ上平上平のようにな

それのアを生かすところから前部後部要素それぞれの項で考察することにしたが、明らかに一語の差声のあるものは一語扱いとした。

先に文学作品であることの利点を述べたが、反対にマイナスの面がないわけではない。例えば声点注記者の解釈によって語の意義の認定がむずかしいことである。古今集そのものの解釈は『袖(中抄)』などとくらべて比較的意義の認定が容易であるが、それでもアが同じ語の場合など、何れの解釈によって差されたか問題となることもある。まして注釈中の語彙に差声された場合は認定のしにくいことがあり、これは形容詞より動詞に問題が多い。

ここでは古今集を中心に、顕昭差声と思われる成實堂本『拾遺(抄注)』・京大本『後拾(遺抄注)』・天理本『散(木集注)』・高(松宮本)・天(理本)・京(大本)・前(田尊経閣本)『袖』等も援用して、院政期から鎌倉期における動詞のア体系を組立て、問

題のあるものについて重点的に考察してみた。堯惠本のような室町以降の伝授による声点本は、相伝の声点以外に変化形アを多く含むため、原則として省略した。(語例中*印は前記顕昭本に、×印は「四座研究」に例のあるもの)

声点本の諸本別に活用形を示すことは冗長・繁雑にすぎ、活用形も揃わぬため、終止形の拍数別に声点本諸本をまとめて掲げ、必要に応じて諸本の略称を記した。(略称は『古今集声点本の研究』に準じる)

金田一氏は鎌倉時代のアを考察する場合、特殊形abcをたて、更に連用形を(イ)(ロ)の二種類に分けて考察された。(『四座研究』359頁)

文学作品の場合、接続する付属語の種類も多く、未然形a・連用形b・終止形cを一括して特殊形と扱うことは問題が多いと考え、左記のように活用形を組み変えた上、付属語を追加して考察することにした。

1 終止形一般 左記以外

終止形特殊 助動詞「べし・まじ」のつくもの

2 連体形

3 連用形一般 (イ)中止形(複合動詞後部成分を含む)・複合動詞

前部成分

(ロ)一般付属語接続 a 助動詞のうち過去・完了の

「ぬ・つ・たり・き・けり」、推量・意志の「け

む・らし(上)・らむ(上)」及び助詞「こ

そ・しも・つつ」などのつくもの b 助詞「て」

のつくもの

連用形特殊 過去の助動詞「き」の連体形「し」・未然形「せ」

已然形「しか」及び推量等の「べし(上)」「のつくもの

4 已然形

5 未然形一般 助動詞のうち打消の「ず」、助詞の「なむ・ば」

などのつくもの

未然形特殊

助動詞のうち使役の「す」、打消の「ぬ・ね・なく」・「まじ・じ」、推量・意志の「む・まし」、受身・自発の「る・らる」などのつくもの

連用形から既に派生名詞となっているものは「研究篇上」で考察しており、ここでは名詞化していないもののみとした。例えば二拍四段の「(わが)聞きに「摘みにも」「行きは」などのへ上平」注記は動詞の例として扱った。助詞「て」などの接続には、助詞固有の型を保つものと複合が強く固有の型を保たないものなど、語により諸本により多少の傾向があるが、すべて付属語の条に送った。(尚ここでは頁数の関係上、語例の殆どを割愛した。)

二 一拍語

終止形が一拍の動詞としては、次の八語に声点の注記がみられる。

得^う・来^く・消^く・為^す・出^づ・寝^ぬ・経^ふ・綜^ふ

右は力変・サ変・下二段と活用も異なり、「出」のような短縮形もまじるが、アからは「消・為・寝」が第(一)類に、「得・来・

出・経・綜」が第(二)類に分けられる。このうち「為・寝・来」はほぼ活用形がそろって類別の確定が可能である。その他も連用形一般の(四)が左のように例が豊富であり、顕昭の『袖』にも例が多く、類別の認定が容易である。

着て・消ぬ・為て・為ぬ・為ける・為つつ・寝て等

上平(…)第(一)類

得て・来て・来ぬ・出て・経て・経にけむ・経ぬる等

上上(…)第(二)類

「来て」239は「何人かきて脱ぎかけしふぢばかま」の例である。「来て」と「着て」の懸詞で、『伏片・寂・梅』は「へ上上」を差し「来て」の声であるが、『訓』は「へ上平」で「着て」と解したと推定した。連用形一般の例がない「綜」の場合も、特殊形で「(糸を皆)へし」437に「へ上上」(永・昆・訓・梅)の例があり、(一)類の「寝し」608「へ上上」(昆)と比べて(二)類であると認定できる(なお、「し」はカ変・サ変には未然形接続であるから未然形に送る)。また前記の「出て」は「振りててそ鳴く」148「へ上上上上」(永)のように前後部がそれぞれ独立した声点のみをここに含めた。従って、「漕きてなむ」669「へ上上上上」(訓)・「振りてつつ」598「へ上上上上」(顕天平)・「待ちてつる」691「へ上上上上」(問答)のような例は複合が強いとみて三拍動詞の項に送った。これらは「振り出つ」へ上上上上」が「へ上上平」に、「漕き出つ・待ち出つ」へ上上上上」が「へ上上平」に変化したものと考ええる。連用形の(イ)のうち中止形の例は、「女郎花」を隠詞とした「皆経知りぬる」438「へ上」(昆・訓・梅)にみられるくらいであるが、

複合語の前部成素の例は次のように若干みられる。

寝覚めて102「へ上上上上」寂、来鳴かむ135「へ上上上上」昆、来鳴き141「へ上上上上」寂・梅、来居る5「へ上上上上」昆

(イ)は(一)・(二)類ともに「へ上」注記で、ここから音価を推定するのはむずかしいが、(一)類が『書紀・名義』などすべて上声であるのに(二)類には左の例もあり、院政期の頃はまだ去声、即ち○●型か●型かと推定される。「得」の連用形から転成した副詞の「え」が『書紀・名義』で去声であることもこれと関係があるろう。

伎都止比奴「へ上上上上」(来聚集) 乾元紀私記

(四)の(二)類には『(岩崎本)字鏡』観本・鎮本名義の「得(たり)」や、『観本名義』の「経(て)・経(たり)」に去声が差されることから、金田一氏も指摘されたように古くは○●型もしくは●型である。古今集では『問答』の「干ず」「憂く」が「去平」であり、『袖』にも稀に去声がみられることから、院政期にはたとえ上声注記であっても音価は上昇調のものが多かったと思われる。(イ)の言い切りの形や複合の弱い複合動詞の前部成素の場合も鎌倉の初までは恐らく(二)類には上昇調が残っていたらう。また(一)類の場合も(イ)とともにネー覚メテ、ネーテのように下降調が残っていたらう。金田一氏は『四座講式』の時代まで(一)類の連用形・終止形は●型か○●型と推定されたが、左のような例もあり、古今集の場合も同様と考えられる。

メサントシテ「へ上上上上」(欲幸) 神代紀明徳本

(一)類の終止形一般は「すとて」589(訓)・「すなり」202(昆)が「へ上上平」・「寝とは」486は『訓』が「へ上上平」・『昆』が「へ上上上」で、

付属語は低く接続するが、特殊形は「すべし」228へ上上上(訓)のように「べし」は高く平らに接続する。『袖』には「(ヤモハ、)スヘキ」にへ上上上(平)が差されへ上平(軽)であることを思わせるが、『御巫私記』には「訓」と同じく「須倍之」へ上上上(平)があり、『観本名義』に「スヘシ」へ上上上(平)があることから、鎌倉期には恐らく●●型であろうか。終止形「す」が名義抄時代下降調であることはつとに著明なことであり、『図本名義』における「クミス(組)」312・「ツミス(坐)」229・「トス(将)」68などの平声軽注記が知られている。終止形一般は古今集の頃も同じ音価とみてよく、特殊形は未然形と同じく高平型としてよからう。

(一)類の終止形一般は「散り来り」459へ上上上上平(昆)・へ上上上平(訓)、「満ち来り」913へ上上上上上平(梅)・へ上上上平(訓)で、ともに動詞はへ上上(平)を差す。「めり・まし」本来の型を生かすへ上上平(一)●●か●●(○型)接続から複合の強いへ上上平(一)へと移行しつつあるが、「来」は高平型とみてよいだろう。特殊形は「来べき」423へ上上上上(伏片・家)で、こちらは低平型と思う。

連体形は(一)類が「する」へ上上(一)類が「くる」へ上上(一)類の例が諸本にみられ、●●型と○●型とみて問題はない。

已然形は(一)類が「すれ・すれば・すればや」「寝れば」が諸本ともにへ上上(一)類であり、高本E・京本『袖』などにも「すれ」へ上上(一)類があり、●●型とみて問題ない。(一)類は「くれば」が伏片・訓・梅ともにへ上上平(一)類で、高E・京・前本『袖』の「(春さ)りくれば」へ上上(一)類や二拍語以上の接続などからみて○●

型と推定される。

未然形は(一)類は一般形・特殊形ともにへ上(一)注記で区別なく●型とみられるが、(二)類は一般形がへ上(一)類、特殊形がへ上(一)注記で●型と○型に分かれる。ここで「せば」の「せ」は動詞の未然形・助動詞「き」の未然形両説あるため別に扱うこととする。

I型一般形 為すとへ上上平(一)類 顕府33*

特殊形 消(なく)に 885へ上(一)類 高貞・京秘・寂・訓(以下略)

II型一般形 来ずは63へ上上上(一)類 伏片

特殊形 来なく(に) 123へ上上上平(一)類 伏片・昆・訓(以下略) なお、「来じ」774がへ上上(一)類・高貞)であるところから「じ」は特殊形接続とみる。「まし」は「為まし」へ上上上(一)類(顕天平)のみで所屬が不明だが、二拍語以上を考えると特殊形に入れてよい。

過去の助動詞の連体形「し」はカ変・サ変は未然形接続で、以下のような例があるが、「来し」のへ上上(一)注記から考えてこれも特殊形としてよいと思う。

為しへ上上(一)類 顕天平501・高貞608(↓『資料篇』)

来しを41へ上上(一)類 伏片・家・永・昆

なお、命令形には「せよ」へ上上(一)類とへ上上(一)類、「来てふに」へ上上(一)類「寄り来」へ上上上(一)類があるほか、助動詞「り」の接続する形もあるが、拍数を問わず一括して考えることにする。以上をまとめれば表1のようになる。

表1 (トは推定形)

第 (一) 類		第 (二) 類			
綜・経・出・来・得		寝・為・消			
く	●● ●、上 ●	ぬす	●● ○、上 ●	一般	終 止 形
く	○平	す	●● ○、上 ●	特殊	
く る	○平 ●上	する	●上 ●上	連 体 形	
へでき	○ ●、上 ●	ね	●● ○、上 ●	(イ)	一 般 形
へできえ	●上 ▼(上)	ねしけ	●● ○、上 ▼(平)	(ロ)	
へ	○平 ▼(上)	ね	●上 ▼(上)	特殊	
くれ	○平 ●上	ぬす れれ	●上 ○平	已 然 形	
へ ⁺ こ	●● ○、上 ●	せ	●上	一般	未 然 形
こ	○平 ▼(上)	ねせけ	●上 ▼(上)	特殊	
こ	○ ●、上 ●	せ(よ)	●● ○、上平 ●(平)	命 令 形	

三 終止形が二拍、連用形が一拍の語

終止形が二拍、連用形が一拍の上一段活用動詞は、次の六語に声点が注記される。

着る^x・似る^x・喫る^y・干る^{*}・見る^{**}・居る^{*}

『袖』ではこのほかに「射る」がみられる。アからは「着る・似る・喫る・居る」が第(一)類、「干る・見る」が第(二)類に分けられる。

このうち「見る」は活用形がほぼ出揃うが、他は散発的であり、特に全語例とも終止形・命令形がみられない。『袖』高本Kに「ハナヒル」へ上上上平↓があり、「名義」の「着る・似る・見る・居る」などから、終止形一般の(一)類はへ上上平↓、(二)類はへ上上↓と確定できる。終止形特殊の「べし」は上二段には連用形に接続するのでこの欄は空欄となる。

連体形は(一)類が「来居る」5へ上上上↓(昆)で●●型、(二)類は「みる」685(昆・高貞・訓)、「(人も)みるかに」1076(寂)、「みるなへに」985(訓)がすべてへ上上上↓で○●型とみてよい。このほか、「干る(間を)」665(寂・昆・高貞・訓)が同じくへ上上↓であるが、これは「昼間」との懸詞である。

連用形一般(イ)の(一)類は古今集に見当らぬが、『御巫私記』で「居(給ふ)・居(給ひぬ)・居(静まりぬる)」に上声が差されており、古今集に注記があれば同様かと思われる。(二)類には「見はやさむ」50にへ上上平上平↓(伏片・昆)の例がある。この類は「名義」に「ミアクレハ」へ去上上上平↓、「ミウカ、フ」へ去上上上↓

平↓(ともに高本)、「ミオロセハ」へ去上上上平↓(観本)があり、他はそれぞれ「ミ」の部分に上声を差す。この類は『神代紀』弘安本・乾元本などに「見(立つ)」の去声がみられる。「四座研究」では連用形第一種を●型とされたが、院政期から鎌倉初期は上昇調の○●型か●型とみてよからう。

終止形接続の「らむ」は、古今集では「(花とや)見らむ」6へ上上上↓(寂)のように上代の名残りをみせるが、これは恐らく連用形一般(イ)に含めてよからう。「べし」もまた「見る」には接続せず「みべき」376へ上上上↓(顕大・昆・梅)となるが、これはへ上平↓注記であることから連用形特殊に含めたい。

連用形一般(ロ)は語例多く、(一)類では「着て」239(訓。伏片・寂。梅は上上で「来て」の解)、「着つつ」410(伏片)、「似たり」692(昆・高貞・訓・梅)、「似たる」73(伏片)、「(起き)居て」993(昆・高貞・訓)がすべてへ上↓注記で、付属語は原則として低くへ上平↓で接続し、下降調と思われる。(二)類は「みて」(伏片・昆)、「みて(のみや)」(伏片)、「みて(を)」(昆)がへ上上↓、「(待ち)みて」(寂)がへ上○↓であり、高平調としてよからう。「みつ」(顕天平)568*がへ上上↑、「みつつ」87(伏片)がへ上上↓で連用形(ロ)に含めてよく、『袖』高本Kには「見つ」のへ上上上↓、「見けり」のへ上上上平↓注記もある。但し、完了の「つ」の活用形には低く接続する例もある。「みきと」811にへ上上平↓(訓)、「へ上上平↓」(昆・高貞)があるが、これは●○○型から結合度の強い●○○型に変化したものとみてよからう。「見まれ(みずまれ)」680へ上上平↓(昆・高貞・寂・訓)、「へ上上上↓

表 2

第 (二) 類		第 (一) 類			
見 る	干 る	居・嘸 る	似 る	着 る	
み る	○ 平 ● 上	(ひる)		● 上 ○ 平	一 般 終 止 形
	/			/	特 殊
み る	○ 平 ● 上	ゐ る		● 上 ● 上	連 体 形
み	○ 上 ●			● 上 [†] ○ 上 ●	(イ) 一 般 用 形
み	● 上(上) ▼(上)	ゐ に き		● 上(平) ▼(平) ● 上(平) ▼(平)	(ロ) 一 般 用 形
み ひ	○ 平(上) ▼(上)		き	● 上(上) ▼(上)	特 殊 形
み れ	○ 平 ● 上			● 上 [†] ○ 平	已 然 形
み ひ	● 去 ▼ 上 ● 上			● 上 [†] ● 上 [†]	一 般 未 然 形
み ひ	○ 平(上) ▼(上)	(ゐ) (ひ) き		● 上(上) ▼(上)	特 殊 形

四 終止形・連体形とも二拍の語

活用形がすべて二拍のグループだが、このうち「有り・居り」の二語がラ行変格であるほかは四段活用動詞である。次の三種類九一語に声点の注記がみられる。

I 言ふ^x・行く^x・入る^x・浮く^x・置く^x・押す^x・織る^x・交ふ^x・貸す^x・刈る^x・借る^x・聞く^x・消す^x・越す^x・咲く^x・去る^x・避る^x・さる(「来る」)^x・敷く^x・頻く^x・染む^x・知る^x・鋤く^x・添ふ^x・焼く^x・足る^x・散る^x・(突く)^x・継ぐ^x・摘む^x・積む^x・釣る^x・問ふ^x・飛ぶ^x・泣(鳴)く^x・抜(貫)く^x・撥る^x・踏む^x・振る^x・覚ぐ^x・増す^x・焼く^x・止む^x・遣る^x・結ぶ^x・行く^x・(呼ぶ)寄る

II 合(会・逢)ふ^x・飽く^x・有り^x・(生く)^x・打つ^x・負ふ^x・折る^x・銅ふ^x・切る^x・繰る^x・請ふ^x・抜く^x・漕ぐ^x・樵る^x・擬る^x・差す^x・鎖す^x・避ふ^x・住む^x・塞く(ぐ)^x・擬ふ^x・縮く^x・立つ^x・付く^x・取る^x・為(成)す^x・成(生)る^x・脱ぐ^x・這(延)ふ^x・漬つ^x・吹く^x・伏す^x・降る^x・干す^x・待つ^x・満つ^x・持つ^x・守る^x・漏る^x・詠む^x・繕る^x・分く

III 居り

二拍動詞は基本形であるため語彙数多く、『四座研究』四五語のうち四一語を包含し、共通する語の割合は38・46%に及ぶ。

金田一氏が第三の類として立てながら『四座講式』には語例のないものに「居り」がある。この語『図本名義・観本名義』には終止形に「上平」が、『御巫私記』には連用形・終止形・連体形

ともに「上平」が差される。古今集では頭昭注などに「沖に居れば」1094の命令形や、寂恵本などに「うらびれ居れば」216の已然形もあって、次のようにほぼ全活用形を埋めることができる。

終止形一般「心焼けをり」1030「上平」毘・高貞、「上」○訓
連体形「いとひしもをる」1011・「とこなかにをる」1023「上平」

連用形一般「をりければ」7「上平」家・伏片・家、「上平」平○
訓

已然形「やまへにをれば」461「上平」伏片・家、「うらひをれば」216「上平」京秘、「平上」平○
損
「ものおもひをれば」153「上平」伏片(虫)

命令形「おきにをれなみ」1094「上平」頭天片・頭大・毘

終止形「こころやけをり」1030は「心、焼け居り」で「上平」が望ましく、「訓」の「上平」がこれに合致する。ところが『毘』が「上平」で、『高貞』が「上平」を差す「高貞」が「心やけをり」に「上平」を差し、この二本が「心焼け」を一語ととったのではないかということ、すでに書いた。(『研究篇上』89頁)。

連用形一般(口)は「心ざし深くそめてしをりければ」7の例で、『伊・高嘉』など定家本及びその系統が「たり」に「上平」○
○を差し、『寂』の注に「折ケレハ可用之 奥ハ居也 居ケレハ哥ニヨム詞ナレトキ、ヨカラス」のように「折り」説をとって

いる。これに対し『家』が〈上平平平上〉を差すのは顯昭本系統が「居り」説をとったと解せられるが、『家』と殆ど同一声点注記の「伏片」がこの丁を脱落する上、『古今集注』にこの注記のないのは残念である。「毘」が「ヲ」にそれぞれ上声平声の二点ずつを差したのは、「居り」〈上平上〉と「折り」〈平上〉の両者の声点を注記したと解釈した(↓『資料篇』口絵写真82頁)

命令形の例は「沖に折れ、波よ」とする解釈もあるが、「折れ」ならば〈平上〉である。更に顯昭の注では「ヲキニキタレナミト云ナリ」、「毘」では「居也」と傍書して声点注記を補強している。以下、I II型については問題点を中心にそれぞれの活用別に記述してゆく。

1 終止形

一般形I型〈上平〉注記(●○型) 言ふ…添ふ…(米鏡) …
一般形II型〈平上〉注記(○●型) 飽く…擬ふ…有り

I型は(一)類四段で〈上平〉、II型は(二)類四段で〈平上〉でまず問題はないが、それぞれの語の認定について若干補足しておきたい。序(6)の「花を」そふとてにみられる「なぞらえる」意の「そふ」は、現行の辞書では「添ふ・副ふ」の項に含まれている。『時代別上代篇』では、擬す・なぞらえる意に「甲類ソが用いられた例をみないところからソ(乙類)フは古形であって、擬すの意の下二段動詞のみそれが残った、とする説がある」として大野透『万葉仮名の研究』の説を紹介する。その理由として氏は「ソ甲フのソ甲(後舌性)は、終止・連体形のフ(後舌性)及

び四段活用未然形のハ(後舌性)の影響でソ乙フのソ乙(中舌性)が後舌化して生じたもの」とされた(940頁)。だが大野晋氏は「添フは甲類のソを多く用いる。擬する意のソフ sofu, ヨソフ yosofu のソは乙類²⁾で、添フとはもと別語かもしれない。」(古典大系「万葉集」四四九頁)とされたが、『岩波古語辞典』では同じ「そへ」の項目に含める。「添ふ」と「擬ふ」のアが異なることは名義抄諸本・古今集等で知られるところである。即ち、「添ふ・副ふ」は『図本・観本・高本名義、御巫私記、四座』や古今『梅』396(滝に)そふで〈上平上〉と安定している。一方、「擬ふ」は『図本名義』85が「譏警」に「ソヘヨト遊」〈平上平上〉と『遊仙窟』の訓を引用し、古今序「そへうた」も諸本〈平上平上〉もしくは〈平上〇〇〉であり、『袖』六「身にいたつき」の条には「此哥(拾遺405)もいたつきにそへていたつらとよめるなるへし」とあり、動詞は〈平上上〉と認定される。筆者は『索引篇』に添付した正誤表でも「添ふ」と「擬ふ」は別項としてたて、『研究篇上』(178)の「諷歌」でも別語と記した。その後久島茂氏も『万葉・図本名義』の例によって別語とされたので、もはやここではくたくたく引用せず、関係する古今集の例のみを左に掲げる。

(はなを)そふとて 序(四段・終止)

〈上平上上〉家、〈平上上〇〉伏片、〈平上〇〇〉顯府・寂、〈平上上〉問答(花をそふ 花をたつねなとする心也)、〈上上上平上〉梅、〈〇平上上〉毘(「ソフトテ」の傍注に「ウ也」)

そへたてまつれるうた 序(下二・連用)

〈平上上〉…梅、〈平平〉…頭府・毘・(清聞)

そへうた 序(切)

〈平平平平〉寂・梅、〈平平○○〉問答・頭府・伊・高嘉・京中・

梅・(清声)・〈上上○○〉(清聞)

この他『訓』は、序(切)に「(花)ラソフotte」として上上上平

○○を差声する。「遅也」の注から考えると、「遅し」上上上平

から「遅ふ」なる語をひきだしたのか。『梅』の上上上平や『毘』

の上上平から推測すると、鎌倉期に「添ふ」上上上平と注記し

た写本があった可能性がないでもないから、「はなをそふ」のよ

うな差声のある写本から移点したものの解釈がつかなくて「遅

ふ」を当てたものかもしれない。「そへたてまつれるうた」の

『梅』上上上…は連用形一般の了だが、『頭府・毘』の平平…

…は平平…ととるべきか、片仮名の「ハ」に上接した声点が

やや下に注記されたものか不明である。なお、「そへうた」の平

平○○は「歌」が●型であるところから安定型の○○●型

を示した可能性もあるが、「□□うた」には頭昭本を含め全平型

の多いこと、『清聞』が〈平平上上平〉からの変化型である上上平

平平を注記せず上上○○であり、「付」の「声句点」もま

た相伝の〈平平○○〉を注記することなどから、一応全平型かと

解釈した。

特殊形I型(上上) 注記(●●型)

「知るべく」上上上平 頭天平 568 *、「消すまじき」上上上

上上 頭天片 1028 *

特殊形II型(平平) 注記(○○型)

「あるべき」47 平平上平 伏片、「切るべきに」421 平平

上上平 毘、平平平○○ 訓、「取るべく」392 平平上平

伏片・訓

「べし」接続は知られているが、その他には「まじ」も特殊形

接続かと思われる。「べし」はラ行変格には終止形でなく連体形

接続である。(二)類の連体形は〈平上平〉であるのに、「べし」が接

続する場合には他の終止形特殊と同じく右のように〈平平平〉注記

となる。これは要するに、「べし・まじ」の復合の度合が強く、

全体が一まとまりになった結果である。

終止形だが連体形と同じ上上平注記をとるものに次の例があ

る。それぞれについて簡単なコメントを記しておく。「言ふな」

(禁止)の『訓』649 上上上平は、「濡らすな」1094の頭昭本が上上

上上平の終止形アクセントであるのに対し、連体形のアクセント

を示す。『訓』はしばしば新しい型をとるので、これもまた、

鎌倉期に「な」の接続が終止形から連体形へと変化していった結

果かと思う。「朝な朝な」聞く」16・(色変り)ゆく」440の『毘』

は、「聞くことよ」「変りゆく頃よ」と下略の意識での差声であら

うか。「鳴く(なる声の)」423「寂」は上上上上平を差し、『伏

片423・寂16・毘140の上上上上平と対立する。この「なる」は

伝聞推定の助動詞で終止形接続だが、この歌を寂恵が伝聞ととら

ず指定ととったとすれば連体形接続であるからこれでよいことにな

る。この他、引用の「と」がつく場合、「と」が下がってつく性

格をきわ立たせる意識もあってだろうか、(一)類動詞の終止形上上

平より上上平注記がやや多い。

「置くとは」486 上上〇〇訓（「起く」との懸詞）、「知る」と（言へは）676 上上〇訓、〇上平 毘・高貞、「散ると」4749 上上平 毘（↓『資料篇』295頁）、「寄ると」1054 上上〇 毘・高貞・梅（但し「清声・清聞」は上上平〇〇）。「寝る」との懸詞）

三拍語でも、「至ると」418（毘・「渡ると」735（訓）が上上上平）である。「散ると（まがふに）」295の『毘』は上上上平と終止形の声だが、室町の『天恵』は上上上平を差し、その注に「是ヲチルトマカフニト声ヲヨメハ一向ニチラサル木ノ葉ノチルカトマカフト云ニナレリ 是ハ此哥ノ本意ニ非ス チラサルトチルトマカフニ依テ声ヲチルトマカフニトヨム也」と書く。「と」を引用ととるか「と共に」ととるかで助詞の^アが変わることが堯惠の頃も歌の解釈の面で問題となった証拠であろう。但しここでは、動詞そのものはともに上上上平である。頭昭本などは「知るとも」も上上上平平平のよう^アに安定しているが、『毘・訓』などに変化が早い。思うに、鎌倉も半ばすぎると、終止形・連体形の形が同じものは^アもまた混同してきて、引用の「と」がつくようなものから徐々に連体形の^アが終止形にとつて変る現象が現われてくる。これは、形の異なるものまでも終止形が連体形に吸収される前兆というべきものか。

その反対に、連体形だが上上上平とならぬ例もある。

（夢と）いふ（ものぞ）569 平平 毘・高貞

いかにも「と」といふ」で一まとまりの^アである。「夢」は上上上平で、引用の「と」は低いまま接続するから「夢といふもの」は

上上上平上上上平平平になりそうだが、これは字余りで「とふ」のように短かく発音されたため、〇〇〇〇〇〇にならずそのまま低く発音する場合もあったのだろう。「夢とふ」553（毘・高貞）に上上上平上平があるのだから、「夢とふ」にも上上上平上平があるものと思う。

2 連体形

I型上上上平 注記（●●型） 行く・言ふ・入る…

II型上上上平 注記（〇〇型） 逢ふ・飽く・ある…

連体形は若干の例外はあるが、(一)類が上上上平、(二)類が上上上平で問題がない。

3 連用形

一般形I型上上上平 注記（●●型）

(イ) 中止形・複合動詞前部成素 言ひ（知らぬ）・貸し…

複合動詞前部には「待ちでつる」など複合した^ア型を示すものもあり、これらは別途考察する。「わが聞きに・ゆきは」の上上平注記は、まだ名詞化せぬ例としてここに含めた。592「根さし（ととめぬ）」には、上上上平上上平『毘・高貞』や上上上平上上平『寂（墨点で「清」と傍注）』がある。前者は連濁もせず二語の連続とみるが、^アからは三拍動詞の中止形とみてもよい。竹岡正夫『全評釈』では動詞ととり、『古典全集』では名詞形ととるが、この類の派生名詞には上上上平平平が多く、前者の差声からは動詞ととりたい。後者の傍注の「清」は清輔本からの書き入れだが、複合した型とみるべきか、疑問とする。

(ロ) 一般付属語接続 a (一て以外) b (一て)

一般形Ⅱ型《平上》注記(○●型)

(f) 中止形・複合動詞前部成素 逢ひ(来る)・立ち…

(g) 一般付属語接続 a (1て以外) b (1て)

特殊形

Ⅰ型《上上》注記(●●型) 問ひ(がたみ)・咲き(しより)…

Ⅱ型《平平》注記(○○型) 会ひ(がたみ)・立ち(しより)…

4 已然形(「り」の接続は別に扱う)

Ⅰ型《上平》注記(●○型)

Ⅱ型《平上》注記(○●型)

Ⅰ型は《上平》、Ⅱ型は《平上》でほぼ安定しているが、時に左のような例外がみられる。

「(会ふと)いへば」635 平上平 毘・▲高貞、「(いもと)あれど」1072 平去平 毘・▲高貞、「問へど(しら玉)」873 平平平

伏片、「(しか)あれども」52 上平平上 伏片

635は、具体的な「言ふ」の意義から離れた上、「といふ」の場合、特に字余りの際は「いふ」が低くなることがあるが、同じ条件の「知るといへば」673『毘・▲高貞』が《上平平》であり疑問である。もう一つの可能性は、六条家本などに「あへは」とあり、その声点を移点したことも考えられないではない。1072は「吾と」の説をとる流も多いが(↓『資料篇』828頁・『研究篇上』61頁)、「と」が双点平声であることから動詞ととり、《平上平》の誤写とする。873・52は誤写であろう。なお「春されば」1008は連濁する流もあり、「夕ざれ」などととも名詞とみる伝授もあるので、別に考察する。

5 未然形

一般形Ⅰ型《上上》注記(●●型) 知ら(なむ)・止ます…

「よみ人知らず」³⁾の《平平平上上上平》『毘・寂』は二語の接合とみられ、連語の段階として未然形に含めたが、『訓』の《平平平平上上平》は一語とみた(↓『研究篇上』260頁)。

特殊形Ⅰ型《上上》注記(●●型) 知ら(ぬ)・希か(れ)…

概ね《上上》注記だが、若干の例外がある。『毘』41は「事トハム」《上上上》とあり、「事問ふ」で一語ととったにしても疑問。「秋の露玉に(ぬかむと)222は『毘』が《平平上上平》であり、「抜か」ならば『訓』の《上上上上平》が合う。『顕天平』526*の「なかゆ」《上上上平》は、他に助動「ゆ」の接続の例がなく、一般形か特殊形か疑問だが、「る」と同じ接続とすれば特殊形であろうか。

一般形Ⅱ型《平上》注記(○●型) 飽か(ず)・降ら(なむ)…
「逢はで・あらで」や、下二段の「触れで・見えて」などが《平上(平)》であるところから、打消の「で」は「ず」と同じく未然形一般に接続するものとした。「で」の語源が「ずて」「にて」の両説あり、n系列の「ぬ・ね・なく」が特殊形接続であるのを考えると、「ずて」からの変化ととりたい。

また、願望の助詞「なむ」は『四座研究』359頁では未然形一般につくとあるが、(二)類動詞につく時は左のように《平平平》型に接続することが多い。

「あら(なむ)」176 毘、「降ら(なむ)」775 毘・▲高貞、318 毘、829 訓、「(聞こえ)付かなむ」998 訓

思うにこれは、連用形一般につく助動詞「ぬ」の未然形「な」に推量の「む」がついたものと解釈の上で混同したのが原因ではなからうか。このほか、『伏片』に「(名にし) 負はば」411(平仄平)や「(声) 立たず」331(平仄平)の例外がある。

特殊形Ⅱ型(平仄) 注記(○○型) 有ら(じ)・打た(む)：ここに若干の例外がある。「あらぬ」232(平仄平)『伏片』「ならぬ」1028(平仄平)『頭天片』・「立たじ」603(平仄平)『頭天片』など、頭照本系統に一般形との混同がみられるが、これについては付属語の条で再考する。以上をまとめると表3のようになる。

五 終止形二拍・連体形三拍の語

このグループは「往ぬ・死ぬ」がナ行変格であるほかは、すべて上二段・下二段活用動詞である。次の三種類七三語に声点の注記がみられる。

- I 明く[×]・上ぐ[×]・荒る[×]・入る[×]・植う[×]・代(替)^かふ[×]・枯る^か・離る^か・着す^か・消ゆ^か・暮る^か・越ゆ^か・放(難)^かく[×]・さ寝^か・挿(箱)ぐ^か・捨つ^か・添ふ^か・初む^か・染む^か・溜む^か・告ぐ^か・伝つ^か・集む^か・並ぶ^か・並む^か・濡る^か・群る^か・燃ゆ^か・焼く^か・寄す^か・佞ぶ^か・割る^か・敢ふ^か・出づ^か・餓う^か・生ふ^か・起く^か・老ゆ^か・掛(懸)く^か・兼ぬ^か・朽つ^か・恋ふ^か・籠む^か・懲る^か・凍む^か・過ぐ^か・擬ふ^か・長く^か・立つ^か・垂る^か・付(着)く^か・詰む^か・解く^か・遂ぐ^か・求(尋)む^か・和(風)ぐ^か・憤(馴)る^か・逃ぐ^か・這(延)ぶ^か・恥づ^か・晴る^か・伏(臥)す^か・古(旧)る^か・触る^か・吠ゆ^か・見す^か・見ゆ^か・愛づ^か・萌ゆ^か・避く^か。

分(別)く

III 往ぬ・死ぬ

『四座講式』にはサ行変格の漢語動詞が多いのにひきかえ、古今集には当然ながら一例もなく、従って平声の漢字音を語幹とするⅣ型を欠く。(ここでは真名序の漢語は含めない。)上声の漢字音を語幹とする形でのⅢ型もないが、『四座講式』には例のない「往ぬ・死ぬ」があって、辛うじてⅢ型を埋めることができる。『四座講式』と共通する語の割合は少なく、1672語で22・2%となる。

1 終止形

- 一般形Ⅰ型(上平) 注記(●○型) 明く・離る・燃ゆ：一般形Ⅱ型(平上) 注記(○●型) 起く・萌ゆ・避ぐ…
- 一般形Ⅲ型(上平) 注記(●●型か) 死ぬ

「けぶりたちもゆともみえぬ草の葉をたれかわらびと名付けそめけむ」433の「もゆ」は、「燃ゆ」と「萌ゆ」との懸詞である。『寂』は(上平)で「燃ゆ」の声を、『永・家』は(上平)で「萌ゆ」の声をさす。『伏片』の(上上平上)は「家」と同じ(上上平上)の誤写とするか、「とも」が鎌倉期以後連体形接続が現れる前触れとして、移点の際に「燃ゆ」の連体形の声をさしたか疑問である。もし後者であるとしても、本来の声は恐らく『永・家』と同じ(上平上)であったかと思われる。

「つれもなき人をやねたく白露のおくとはなげきぬとはしのはむ」486の「おく」は、「起く」と「置く」との懸詞である。『毘・高貞』は(上上平)を、『寂』は(上平)をさし、『伊・

表3

III	●	○	●	一般	終止形
	○	●	○		
II	● [†]	○	●	特殊	連体形
	○	○	●		
I	●	○	●	(イ)	連用形
	○	●	○		
	●	○	●	(ロ)	一般
	○	●	○		
	● [†]	○	●	特殊	特殊
	○	○	●		
	●	○	●		已然形
	○	●	○		
	● [†]	○	●	一般	未然形
	○	●	●		
	● [†]	○	●	特殊	特殊
	○	○	●		
				語例	
ラ変 居り(命令●○)				(-)類動詞 咲く・散る…	
				(-)類動詞 飽く・切る…	

表4

III	●	○	●	● [†]	○
	●	○	○		
II	○	●	○	○ [†]	○
	○	○	○		
I	●	○	●	●	○
	●	○	○		
	●	○	●	● [†]	○
	○	●	○		
	●	○	●	●	○
	○	●	○		
	●	○	●	● [†]	○
	○	●	○		
	●	○	●	●	○
	○	●	○		
ナ変 往ぬ・死ぬ				(-)類動詞 起く・恋ふ…	
				(-)類動詞 明く・暮る…	

▲高嘉』等の定家本は「むく」を書くから、ともに「起く」を示している。『訓』の「ヲク」にへ上↓注記は「置く」の連体形とみてよからう。「和」の「平平」『古今集秘注』73*は振仮名小字のための位置のずれであらう。

特殊形を別記しなかったが、助詞「ばかり」の接続するものには特殊形と一般形が現れるほか、『訓』には「オモフハカリ」も

みられる。これは『平家正節』の「申す^ス斗なし・思ふ^スばかりも」や、『ロドリゲス日本大文典』の *msu facarimo gozanai* に連なるものであり、複合の度合が弱くなって動詞との間に息の段落ができる「ばかり」の独立性が強くなり、従って語頭の濁音を避けるようになったものだろう。これは「ばかり」の意義や接続の変化と関係するので別稿とする。

2 連体形

- Ⅰ型《上上上》注記(●●●型) 放なぐる・告つぐる
 Ⅱ型《平平上》注記(○○●型) (浮かび)出でづる・晴はる…
 Ⅲ型《上上上》注記(●●●型) (恋ひや)死しぬる
 3 連用形

- 一般形Ⅰ型《上平》注記(●○○型)
 (イ) 中止形・複合語前部成素 明け(たてば)・焼やけ(居り)…
 (ロ) 一般付属語接続 a(て以外) b(て)
 一般形Ⅱ型《平上》注記(○○●型)
 (イ) 中止形・複合語前部成素 起たき(臥し)・折ひり(延のへ)…
 (ロ) 一般付属語接続 a(て以外) b(て)
 特殊形Ⅰ型《上上》注記(●●●型) さ寝ね(し)
 特殊形Ⅱ型《平平》注記(○○○型) 朽くち(し)・脱だぎ(掛かけ(し)…)

諸本により解釈のゆれているものに左の「つむ」がある。

- (あちきなし) なけきなつめそ45(「なつめ」を隠す)
 平平上上上上平 伏片・▲家、○○○○○平上平 寂
 平平上上上上平 訓、平平上上上上平?○平 昆

『日本国語大辞典・古語大辞典』などには、万葉360の「玉藻刈りつめ」と同じく「集める」の意としてこの歌の例が上げられる。『全評釈』も同様で、「そんなに嘆きを集めためるな」という気持。」で、「そんなに悲嘆にくれて思いつめるな」と訳す。「積む」には「集めたくわえる。ためる。」意があるから「集む」は同じ語源としてよい。「集む」の差声の例はないが、「積む」には

『観本名義』に「ツム」《上上平》があり、古今1069「楽しきをつめ」にも頭昭本や『訓』が《上上平》を差す。連用形一般なら「集め」は《上上平》であり、連用形特殊なら《上上上》である。助詞「な」…(そ)は古今では多く連用形一般に接続するが、「…な言ひそ」^{上上上上平} 811(昆・高貞)・「…なとめそ」368(訓)のような特殊形接続もあり『伏片・▲家』の《上上上平》は恐らく「集めそ」と解したものでらう。万一、原本の「ツ」が平たい古体で、平声を上声と誤まって書写した可能性もなくはないが、少なくとも『伏片・▲家』の書写の人は「集めそ」の解釈だといえる。一方『寂・訓』の《上上上平》は、「集め」ではなく「思ひ詰む」などの「詰めそ」といったものでらう。「詰む」は現代語で(二)類動詞だが、古い確例がない。だが「積み石」の見出し表記のある「つみ石」は「礎」の義では「詰み石」と解され、左のように低起式であるところから、『寂・訓』は「嘆き詰む」と解したものと思う。

ツメイシ・ツメイシ 《平平上上》、ツミシ 《平平上上》観本名義
 都美以之 《平平上上》 凶本名義、《平平上上》 高本和名、《上上上》 前本和名

「礎」の義の「つみ(め)石」は、「固くふさぐ・すぎまなくつめこむ・敷きつめる」意の「詰み(め)石」であって、「積み重ねる石」ではない。「前本和名」の高起式は、「積み石」と解したため後世の差声であらう。辞書におけるこの項は、「積み石」とは別項にし「詰み石」の表記を当てることが望ましい。

一般形Ⅲ型《上平・上上》注記(●●●型か)

(ロ) 往に(けり) 313上平 昆、死に(たらは)上上 京秘64*

Ⅲ型連用形(向)に「へ上上」と「へ上平」がみられ、終止形・命令形も「へ上平」であるところから、ともに●●型とみてよからう。金田一氏は、(イ)を●●型、(ロ)を●●型と推定されたが、完了の助動詞「ぬ」の固有の型○を残した●●型から次第に●○型へと変化しつつあったのではあるまいか。特殊形は「拾遺抄」頭昭本に「へ上上」とあり、●●型としてよい。

4 已然形には確例がない。

5 未然形

一般形Ⅰ型《上上》注記(●●型) 植多(は)・消え(ず)は…
特殊形Ⅰ型《上上》注記(●●型) 越え(じ)・捨て(ぬ)…

未然形であるのに《上上》でなく《上平》注記のものが若干ある。「燃え(燃え)」1028や、「枯れ(なくに)」「へ上平」155(訓)などで、解釈が異なるためであろうか。「告げ(なむ)」855(昆・▲高貞)の「へ上平」注記は、「なむ」を助詞とらずに完了の助動「ぬ」の未然形に「む」のついたものとしたために、連用形の声点を注記したのではなからうか。但しこの部分『昆』には注釈がなく不明である。

一般形Ⅱ型《上上》注記(○●型) 恋ひ(ば)・見え(ず)…
特殊形Ⅱ型《上上》注記(○●型) 生ひ(ぬ)・掛け(じ)…
打消の「ぬ」は完了の「ぬ」と異なり特殊形接続であることがこれらの例で明瞭である。「見えぬかな」392は諸本「見えなむ」とあるが、『伏片』は見エナイカナアとったものだろう(↓『資料篇』)。

一般形Ⅲ型《上上》注記(●●型) 往な(ば)・死な(ず)…

特殊形Ⅲ型《上上》注記(●●型) 往な(む)・死な(まし)…
『寂』365の「(たち別れ)いなばの(山の)」は、「往なば」と「稲羽(の山)」との懸詞である。『研究篇上』312・289頁にいずれともとれる旨を記した。

ここで『四座研究』318頁と大きく異なるのは、(ロ)の一般付属語接続を○●型とした点である。「て」の接続をみると、助詞固有の型を保って『問答』などは、(一)類は「へ上上上」(置きて)など、(二)類は「へ上上上」(起きて)など)とあるが、新しい型の多い『訓』になると(一)類に《上上上》は一例もなく《上上平》(置きて)など)のみとなり、(二)類では《上上上》と《上上平》がともに多出する。これは(一)類は●●型から一まとまりの○●●型に、(二)類は○●●型から一まとまりの○●●●型に変化する過程を現わすものと言えよう。諸本による傾向など、詳細は別稿の助詞の項で述べる。以上をまとめると表4のようになる。

注(1) 『四座研究』480頁では「まし」本来の型を●●型か、とされる。

(2) 「語の派生について——ヤヤ・イヤシクモ・イヤシの成立、及びシツム、ソフ——」(『津田塾大学紀要』14)

(3) 「索引篇」383頁上-2行の下に「懸」「燃ゆとも」×「萌ゆとも」を、下冒頭に「萌」を入れる。

引用文献 上野和昭『御巫本日本書紀私記声点付和訓索引』、鈴木豊『日本書紀神代卷諸本声点付語彙索引』、『乾元本日本書紀所引日本紀私記声点付語彙索引』、秋永一枝『袖中抄声点付語彙索引』、『頭昭拾遺抄注・浄弁本拾遺集声点付語彙索引』(未刊)等、「アタセント史資料索引」による。